

問題児の幼児期

——登校拒否児を中心に——

篠崎忠男

小学生以上の問題児が幼児期にどんな状態であったかという問題について、具体的な事例に即して考えてみよう。

(1) D君の場合

D君が高校へ行ったがらなくなったのは、二年生の二学期であった。彼は夏休み中にいつものように宿題をやらないでいた。彼にとって学校とか勉強というものは、どういふものか、ものういものであった。クラスメイトのBとかNとかが、まるで一分の時間も惜しいというように参考書やノートにしがみついている気持が、彼には理解できなかった。夏休み中、自分の家で、気ままにしていられることは楽しかった。サラリーマンの父は朝は早く出て、夜は大がい遅く帰ってきた。そういう父も大へんことだろ

うと思うこともあるが、彼の心の中からすぐに消え去った。一学期の成績の悪さにははじめびっくりしたが、すぐにあきらめがきて、なげやりの気持が来た。しかしその心の中をよぎったものは、ほとんど意識に上らなかつた。勉強なんて意味がない、という考えがはっきりしてきて、しかも大へん理屈に合っているように思えた。それだけがはっきり残った。

二学期からDの登校拒否が始まった。父の知り合いのカウンセラーがきた。彼はDと雑談して、五日並べをして帰った。翌日から登校したが、そのうちまた休み始めた。体育の時間のある日が多かった。母がカウンセラーの所に通った。登校はだんだん楽になった。

その幼児期など

Dが生まれた時、両親にとって初めての子なので大事にされた。元気であった。しかし二歳で小児ゼンソクを起してから、周囲の事情が変り出した。両親ことに母が心配し出したからである。症状がひどくなると夜中でも医師のもとに走った。また三歳で脚を折った。三か月入院し、その後もしばらくマッサージに通った。その後は「ケガをさせまい」という気持が家族につよくなり、過保護がひどくなつた。また、母は職業をもっていたので、昼間は祖母に世話された。祖母は面倒がよすぎる位であった。妹と六歳の差があり、妹が生まれるまで一人っ子として大事にされた。た。

幼稚園では折った脚が十分治っていないで不自由というだけで、登園を嫌がるという事はなかった。ただ友だちらしい友だちがなかった。内気で不活発な子になっていた。

(2) J君の場合

J君は中学一年生である。小学生の時転校し一度登校拒否を起したが、親子でカウンセリングをうけに通い、また、ゼンソクのために入院して規則正しい生活を身につけて帰ったりして、通学

するようになった。中学一年になり一学期は大した休みもなく登校したが、二学期になると余り行かなくなり、十二月には一回登校したきりであった。

その頃のJ君の気持は、父や母とは大いに違い違っていた。母は学校へ行かぬと将来のことを、はっきり考えた訳ではないが、心配で心配でたまらず、中学を卒業しない人間が自分の家庭にできるなんてありえないし、あつてはいけないように思えた。だからつい「そんなにしてるんなら、勉強したらどうなの」「学校のことどう思ってるの」「学校じゃ来週から中間テストだつてよ」と言ってしまうことがよくあつた。初めは反発も口頭でかえってきたが、この頃は、暴力が入る。何も恐れるものなしといった傍若無人ぶりに、母には見える。「学校」「勉強」という言葉が父か母の口からでる。スリッパがとび、枕がとび、ガラスに文鎮がとんでゆき破壊音をたてた。前からきびしい父が、こんなことが許せるものかと腕力で立ち向つても、効果はなく、かえつて荒れを増すばかりだから、理性で自己統御している。親の立場もつらいものだと思う。

Jにしてみれば、学校も、勉強も大したことじゃないのだ。自分はずっと大へんな苦しみをもっているのだ、と心の底の方で感じていた。感じてはいたが、それが何であり、何事であるのかは

まるつきり判らない。ただ、それは学校や勉強や、そして、友人や先生や、父や母や、妹などとは別の次元のものだと体のどこかで判っているようなものだった。自分でもそれをつかまえることはできなかったが、そういうものがあることに気づこうとせず、外側の学校、勉強、法律、就職のことなどからばかりみている私たちの言葉には耳を覆いたくなくなった。Jはそういうことを言われると、傷口をえぐられるような激痛を感じるのだ。だから自らを守るために、彼は相手の口を封じようとする。ガラスを割る、母を叩く——腹立ちの余りやったことが効果的であると知ってからは、すぐその手段を用いた。父や母の絶望的な困惑と驚愕の表情は、Jに最初は快い驚きであったが、自分のやっている行動の意味が通じないことに、いい知れぬ絶望とある悔いを感じていた。

母の知人の紹介で三時間ほど電車にのって、Jはあるカウンセラーに通った。Jの暴力はなくなり、落つきが出て、遊びにきた友人を拒否していたのに、遊ぶようになり、やがて登校した。Jが四回カウンセリングに通ったあとに登校できたのであった。回復ははい方であった。

その幼児期など

Jは胎内中、出生など普通であり、発語が少し遅かったほかとく

に変ったことなく発育したが、三歳の時にゼンソクを、なんらきっかけと思われるものがなく、突然におこした。このために両親は心をつかうようになり、過保護になり、彼はわがままな傾向をもち、思い通りにしようとし、思い通りにならないとカッとなる癖があった。幼稚園に二年間通ったが、入った年の六月にリユーマチになり、一年ほど医者に通った。幼稚園では不活発で、受身的だが、自己中心的な所があった。

(3) M君の場合

M君の登校拒否は、自分では、口端のおできを気にすることから始まったと思っていた。口端のおできを、クラスの皆が注視しているように思った。そのうち、家の近所の人が、そのおできをじろじろみているような気がした。しかし彼は、相手の人が、通りすがりに自分の口端のおできを注視した瞬間を、自ら確かめたことはない。しかし確かめたと同じように、いや、相手から直接に、「あなたの口端のおでき、みっともないわねえ。そんなみっともないものをつけて、よくもこのまっ昼間の大道を、顔をあげて歩けるわねえ」とさげすみと、いわれない非難と、冷笑の言葉をあびせられたのだと確信しているのであった。もちろん彼は

そういう言葉を耳にしたことがないことは知っている。しかし彼は、自分は、人の気持を、言葉をきかないでも、相手の目をみないでも、敏感に感じとれる敏感さをもっていると思ひこんでいた。

彼は父は出張がちであるし、母親が勤めにでるのを幸い、いつものように登校するとみせては、学校へゆかずに戻ってきた。その中、そういう面倒な手順を省略して、彼は登校をしなくなつた。彼は言葉で反発はしたが、乱暴はしなかつた。

母はカウンセラーを訪ねた。間もなく彼は登校しはじめ、だんだん休むことも減少してきた。しかし彼の自我には弱いところが、未発達の部分が多いし、ある種の不安があるから、彼自身カウンセリングをうけることをすすめられて、ある期間カウンセリングをうけた。だんだん彼の問題は少なくなつて行つた。

その幼児期など

Mは一歳の時に養子にきて、今の家庭で成長してきた。大事に育てられた。幼稚園へは余りゆきながら、よく休んだ。集団の中にとけこめず、一人遊びの方が多かった。

(4) B君の場合

B君の登校拒否は中学二年の五月から始まつた。彼の心ではもっと前から何か変つたうごきがおこっていたが、彼には意識されなかつた。それが最近、重みとして感じさせられてきたのだ。学校へ行く気持が、その重みによってひきとめられる感じであつた。初めは行つたり行かなかつたりしていたが、そのうち、まったく行かなくなつた。父は担任に相談した。神経科の医師にみてもらつた。カウンセラーにも相談した。Bが再登校したのは、一年余りを過ぎてからであつた。

B君のばあい、父はBに対し理解的な態度に終始した。Bのたつた一人の兄はかつて躁病と診断されて入院したことがあり、今は勤めに出たり、やめたり、家業を手伝つたり、ぶらぶらしたりしていた。その事について、彼は格別の心配はしていないつもりであつた。兄のことは、父や母に一切まかしていられるつもりでいた。しかし、心の中の意識のどこかぬ所では、兄を苦しめた何か正体の判らぬものが、自分の行く手に、突然にあらわれ、自分の進路をがच्चりとふさいでしまうおそれがあつた。それは彼の描いた絵画にしばしばあらわれていた。絵画の中には劣等感も表出されていた。そのような心の中の「彼を苦しめるもの」は、心

の外に表出されることによって、その無意識的支配力を弱めていった。

彼も暴力を振うことはなかった。父親が理解的態度で接したのもその一因であろう。

その幼児期など

彼が登校拒否を起すまで、彼は友人に好かれる人物であった。小学校でも、対人関係のよい子であった。幼稚園へは行かなかったが、近くの子とは遊んだし、特に問題のない子であった。父は子どもに対し理解的態度であり、素朴、正直、勤勉の特性をもった人物であった。母は気さくで、気に入っても入らなくても、あけびろげに感情をあらわしがちであった。

(5) Sさんの場合

Sさんのばあいはいわゆる登校拒否ではない。高校三年生になって自分の進路についての悩みがつよくなり、しばしば学校を休んだのである。彼女の悩みの一つは成績が自分の思ったように向上しないことであった。第二は、友人たちとの関係がよくないことであった。友人とはグループづきあいだが、それが彼女にはう

まくゆかなかった。第三に近ごろ、体が太ってきたことで容姿を気にしていた。これは大して気にしない子もいるが、Sにはなにか決定的な大欠点のように思えてしまうのであった。成績の点ではいっそのうちに三流校に転校しようかと本気で思い悩んでいるのであった。

両親はカウンセラーを紹介されて、Sは二回、カウンセリングをうけた。そのカウンセリングの中でも考え、そのあと自分でも考え、彼はSを見直すところもあった。S自身もカウンセリングの中で自分の考えが整理され、帰ってきてても、一人でとつおいつ同じ所で考えあぐんでいたのと違って、なんとなく自分の考え方が、自分の力で先へ先へと少しずつ進むようであった。そして、二期期からは通学するようになった。

その幼児期など

Sさんは特に目立つことなく、誕生、生育したが、三歳で肺炎を病んだ。第一子のため大事にされて、自己主張は強かった。友だちは特定の仲よしができる、その子とはかり遊んで他の友だちとは遊ばなかった。たった一人の弟(中一)との間に特に問題はなかった。

(6) 問題点を考える

これまでに五つの例をみた。その叙述にはその人物の主観的な内面の世界が如実にわかるように、共感的に推察して書いたところもいくつかある。(それがもし事実とずれているとしたら筆者の誤りというほかはない。しかしその中の多くは、カウンセリングの記録や、カウンセリングの中で得られた材料——たとえば、Bの描いた数十枚の絵画などに依拠している) 多くある問題児のうち、たった五つの例から、何か結論めいたものを引き出そうとしても、それは無理なことである。しかし多くの他の例と同じようなことを、恰も一つの例が代表するかのようには、何事かを私たちにそれとなく示していることもある。また各事例は個性的ではあるが、又共通性をも示しているものもある。そこで共通性をそれとなく示しているものを探ろう。

(a) 幼児期に必ずしも、その後の問題児の手がかりを見出し得ない。——これはB君のようなことがあるからである。そのほかにもこれに似た例はあるのである。ここに詳細にすることをしなかつた、高一生のN君のばあいは、幼稚園時代は大へん元気に活動していた子であった。——これに対しては一般的な対策をと

るほかないであろう。

(b) それにも拘らず、幼児期に何らかの問題をもったものが、それと類似か二次的に他の問題をひきおこすこともある。……DとJは小児ゼンソクをもっていたし、このことが二次的に性格的な歪みを与えていた。Mの場合は実父母を離れ、養家に育つという心理的環境の大きな変動があり、Sの場合は、強い自己主張と狭い交友の問題は後におこった友人との関係不良と同質の問題であった。他にも似た例は多い。——これに対しては対策が必要である。

(c) 自我の未発達、歪んだ又は偏った発達のことが多い——原因は親の過保護、過度の心配、子の誤った主張を許容したこと、——これに対しては対策が必要である。

(d) 子どもの健全な自我を育てることに着眼しなかつたこと——子どもの自主性、自立性、自発性、責任性、決断力などを育成することをおろそかにしたこと。

(e) 子どもの精神的生命(リアル・セルフ)に目をつけてそれ

を育成することに気付かなかったこと。

——この(d)(e)については一般的対策として、広い観点より実施する必要がある。

(7) 幼児期の教育でしたいこと

ここでとりあげたのは小学生以上の問題児の幼児期であるが、幼児期にすでに問題児である子どももある。そういうものはすでに問題をあらわにしている所以对策しやすいし、対策しているであろう。しかし見逃しということもあるので用心したい。

(6)(b)(c)に対しては不健全な自我を発達させないための対策が必要なことを前記したが、それはむしろ(d)の健全な発達させることによつて自然に行なわれる部分があるので、以下、(d)(e)についての一般的対策を述べる。

(I) 健全な自我（自主性、自立性、自発性、責任性、決断力など）の育成——この中一つについて述べよう。自主性は、まず子どもの内部に自主性が潜在すると大人（教師・親）が認める。そしてそのことが子どもにも判るように言葉で伝える。次に自主性に向つてつねに話しかけ、それが働いたら、働いたその時に子ども

にも伝達する。くり返すと、子どもは自立性の働きに歓喜を覚えてくる。他も同様である。

(II) 精神的生命（リアル・セルフ）の育成——あなたの心の底の底にある、だれに言つてもどこに出しても通用し、その人を生かし、他の人をもつには生かすものがそれである。そういうもののあることを思い（少なくとも子どもに對する時はそう努力する）、そのものが、それにひそかに焦点をあてて見、聴きとり、助力することによつて成長するのをみつめてゆく。やがて子どもは子どもながらに、生き生きとおのが生命を生きることが、わかつてくる。（それをみつめることを忘れて、学業成績や、エリート・コースや、身体的健全や、世俗的幸福にばかり焦点をおくとき、問題が発生しやすくなってくる）

以上、不十分ながら、何とか問題児に関連して、教育の上で、又人間の生きる問題の上で、大事なことを考へてしるした。ご参考になるところがあれば幸である。（むさし心理研究所）